

平成31年度 徳島県小学校教育研究会 研究主題

徳島県小学校教育研究会

事務局長 泉 裕 康

1 研究主題

新たな知を拓き 人間性豊かな社会を築く 日本人の育成を目指す小学校教育の推進
—主体的・対話的で深い学びを通して
自ら未来を切り拓き、ともに豊かな社会を創る子供の育成—

2 主題設定の理由

平成25年度から「新たな知を拓き 人間性豊かな社会を築く 日本人の育成を目指す小学校教育の推進」を研究主題として、新たな価値を創造し、これからの時代を切り拓く力と可能性をもった子供の育成を目指し、実践的な研究を積み重ね、各部会において様々な研究成果と実績を残してきている。

そのような中、平成29年3月に告示された新学習指導要領の前文に「これからの学校には、教育の目的及び目標の達成を目指しつつ、一人一人の児童が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値ある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる」とあり、その実現に向けて必要となる教育課程の基準が大綱的に定められた。

今後の日本社会は、生産年齢層の減少やあらゆる面でのグローバル化、さらには、高度情報化、科学技術の進展などにより社会構造等の環境が大きくまた急速に変化し、先を見通すことが難しい時代となってくる。また、少子高齢化が進む中では、持続可能な社会の担い手として、個人と社会の成長につながる新たな価値を生み出していくことが期待されている。

こうした状況を踏まえ、これからの教育は、学校と社会とが認識を共有化し、変化が激しく未来の予測が困難な時代に向かって、学習したことを生活や社会の中で課題解決に生かそうとする力をもとに、価値観の違いや文化を前向きに受け止めながら、自らの力で未来を切り拓き、だれもが幸福と感じられる、ともに生きる豊かな社会を創り出すことのできる子供を育成しなければならない。そのためにも、自分や地域に対する自信をもたせ、自らの夢や希望の実現に向け、子供たちが社会の変化によりよく対応し、主体的に自分の力で人生を切り拓いていける「生きる力」を身に付けさせていくことが重要であると考え。

本研究会は、これまでの研究の実践や蓄積・成果を継承しつつ、知・徳・体の調和のとれた教育活動を一層充実させていくことが重要な課題と考え、各部会が研究を深めてきている。これからはさらに、新学習指導要領を見据えながら、子供たちの『学び（教育活動）の質』の向上を図っていくことに重点を置きたい。特に、「何のために学ぶのか」という学習の意義を共有しながら、「何ができるようになるか」という学習する子供の視点に立ち、「何を学ぶか」という学習内容と「どのように学ぶか」という学びの過程を重視していきたい。単なる知識・理解にとどまらず、実社会や実生活の中で、知識・技能を活用しながら課題の発見・解決に向けた「主体的・対話的で深い学び」による『学びの質』を改善していくことが必要であると考え、教育活動（教育実践）の充実・向上につなげていきたい。

この三つの視点による『学びの質』を高めるために、今までも習得・活用・探究のバランスと子供の学びを起点とした実態に即した柔軟な取組や教育実践、あわせて、資質・能力をよりよく育むための評価の具体化が必要とされている。この評価は、子供たちに学んだ価値を自覚させることが重要とされており、指導したことが子供たちに身に付いたかをきちんと把握し、その価値を意味づける作業を繰り返してこそ深い学びにつながると考える。

また、よりよい社会を創るという理念を学校と地域社会が共有し、社会との連携及び協働により実現を図っていく「カリキュラム・マネジメント」が提唱され、各学校で教科や学年の枠を超え組織運営を改善していくよう取り組んでおり、本年も教育課程を核に教育活動や組織運営等の学校全体のあり方を見直していく「カリキュラム・マネジメント」を実現するよう、移行期間中に着手しておきたいことである。

以上の点から、移行期において求められている『学びの質』の向上、ならびに、今後ますます厳しくなる時代をよりよき方向へと変革していくことのできる子供の育成を目指す新学習指導要領の方向性を見すえ、今回の研究主題とともに「**主体的・対話的で深い学びを通して 自ら未来を切り拓き、ともに豊かな社会を創る子供の育成**」という副主題を設定した。

3 研究の視点

今年度も次の三つの視点に基づいて、研究に取り組んでいきたいと考える。

(1) 「主体的・対話的で深い学び」の充実

① 「主体的・対話的な学び」の過程へのアプローチ

主体的な学びについては、学ぶことに興味や関心を持ち、見通しをもって粘り強く取り組むことができるようにするとともに、自らの学びを振り返る場の設定も大切になってくる。特に学習の前後で「以前より、よくわかるようになった」「自分が成長した」という自覚をもたせることが肝要である。授業を通して自らの学習の成果を明らかにして学習に対する意欲を高めていきたい。

対話的な学びについては、これまでも取り組んできた言語活動の充実に関する一定の成果と課題を踏まえておく必要がある。その上で子供同士の協働、教職員や地域の人との対話などを手がかりに、教師の「問い」を重視・精選していきたい。学習過程を一層充実したものにし、より確かな学びの手立てとして、話し合い、ディベート、ワークショップ等多様な方法で他者と対話する場面を単元全体や授業の中に明確に位置づけ、計画的、系統的、継続的に展開し、自らの考えを広げ深めることをねらいたい。

② 深い学びの過程へのアプローチ

深い学びとは、習得・活用・探究という学習過程の中で各教科等の特質に応じた「見方や考え方」を働かせながら、知識を相互に関連づけてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう学びである。質の高い深い学びを実現し、生涯にわたって能動的(アクティブ)に学び続けることができるよう「授業の工夫改善を重ねていくこと」を重視していきたい。対話的な活動の場を通じてお互いに学び合い、これまでの「見方や考え方」が更に成長したことを子供自身が自覚し、新たな発見を得ることができる授業を目指し、工夫を重ねていくことが大切である。今後各部会においても、さらに実践的な研究を深めていただきたい。

(2) 「カリキュラム・マネジメント」で『学びの質』の向上を図る

「主体的・対話的で深い学び」に全校で取り組むためには、「カリキュラム・マネジメント」が必要となってくる。各学校における子供の実態や地域の実情を踏まえ、学校教育目標の実現に向けて、新学習指導要領等に基づき「主体的・対話的で深い学び」を取り入れた教育課程を編成することが求められている。そして、学校教育目標で具体化された資質や能力が実際の授業や教育活動の中で実現されたかどうかをチェックし、その改善・充実(P・D・C・Aサイクル)の好循環を図っていくことである。

また、学校のグランドデザインを教職員全体で考え、教育目標を含め、「生きる力」が求められる豊かな人間性、健康・体力、確かな学力を全教職員が理解していくことが重要とされている。さらに、1年生から6年生までどのように子供たちの資質・能力を育てていくか具体的な「育てたい子供像」を明確にし、子供の実態に即して見直していくことが「カリキュラム・マネジメント」につながってくる。このことから、育成すべき資質や能力を学校教育目標において具体化し、必要な教育内容や指導方法等を、教科や学年の枠を超えた教科横断的な教育課程全体の視野に立って効果を発揮できるよう、系統性を重視しながら取り組まれてきている。本年も、教育課程の実施に必要な学校内外の様々な人的・物的教育資源を効果的に活用していく取組を一層充実させ、子供の学びの環境を整えていきたい。そのためには教職員が全員参加で学校の特色ある魅力的な教育課程を創り出していくことがますます期待されている。

学校での学びが、学校だけの空間で閉ざされ、教科の枠だけに縛られるのではなく「社会に開かれた教育課程」の視点で「カリキュラム・マネジメント」を進めていくことが求められており、各部会においても学校教育という営みを通じて、将来よりよい社会を創成し、地域・社会と連携・協働しながら未来を創るために必要な知識や力を育む『学びの質』の向上の実現につなげていけるよう実践を積み重ねていただきたい。

(3) 子供たちとともに学び続ける教職員

子供たちとともに学び続ける教職員であることは、たえず自己の教師力の向上を図っていく学びの主体であることを意味する。我々教職員には、教職に対する強い情熱、教育専門職としての確かな力量、そして総合的な人間力等実に多くの資質・能力が求められている。また、教育は時代の要請に応えるべく、その使命を担っている。目の前の子供への深い愛情を基盤に、たえず学び続け自分を高めていくことができるような教職員でありたい。教育の不易の部分から軸足を外すことなく、新たな教育課程にも柔軟に対応できる指導力を備えた教職員でありたいものである。

本研究会がこれまで取り組んできた教育実践の蓄積に基づく授業改善の活性化により、子供たちの『学びの質』の向上を図り、これからの時代に求められる資質・能力を育んでいきたいと考えている。また、これまでの教育実践を後に続く教職員にもしっかりと引き継ぎつつ、授業を工夫・改善していく必要もある。

「何のために学ぶのか」という学習の意義を共有しながら、自らの実践を研究会の場で提案し合い、お互いの優れた指導法を共有し『学びの質』の向上を目指し、工夫を重ねていくことを期待したい。共に考え高め合うことで、より高次元な教育実践とし、目の前の子供たちの「主体的・対話的で深い学び」に結びつけたいものである。